

## めんそーれ 久米島へ

今年の全国大会は、沖縄県の久米島で開催されます。久米島の海洋深層水利用の取り組みについては、すでに現地の関連施設を訪問された方、また、各種記事や講演等でご存知の方も多いと思います。ですので、ここでは少し趣向を変えて、沖縄県海洋深層水研究所（以下「研究所」）のある真謝地区にまつわる「ディープな」海と久米島のつながりの話をご紹介します。

琉球王国時代、久米島は「風待ちの島」という役割を持っていました。琉球王府と福州との間で進貢貿易が盛んに行われたこの時代、久米島のすぐ西を流れる黒潮流域は、風を頼りに進む当時の帆船にとって一歩間違えばどこまでも漂流してしまう危険な海域です。そこで、琉球や中国（明・清）の船は、琉球王国の西の玄関口である久米島で、航海に良い風が吹くまで待ち、その風に乗って黒潮を渡り切っていたのです。

その様子の一端は、沖縄県立博物館の進貢貿易に関する中心的展示である「奉使琉球図」に見ることができます。1756年に冊封の儀式のために清から首里に渡った冊封使を描くこの二十枚組の絵図のうち4枚が久米島での風待ちや台風避難に割かれています。そして、描かれている港は、研究所にほど近い旧真謝港。奉使琉球図9枚目「候風十日」（久米島で風待ち十日間）に見える役所の美しい石垣や、この航海のあと清から久米島に寄贈された媽祖を祀る小さな祠は、それぞれ「旧仲里間切蔵元跡」「菩薩堂（真謝天后宮）」として、研究所のある真謝集落の一画に現存しています。また、明の時代に紬（絹織物の一種）の製法が久米島に伝わり、今では「久米島紬」が国の重要無形文化財となるほど盛んとなったのも、黒潮に起因する海上貿易の中継地だったことが大きな要因です。そして、こういった歴史が、離島でありながら外から来た人々や新しい技術、文化への受容性が高いと言われる久米島の島民性を培っ



旧仲里間切蔵元跡の石垣（琉球石灰岩）。内部の建物は現存しておらず、昭和期は木造の小学校校舎が代わりに建っていました。現在は非公式ゲートボール場としてよく使われています。

たとも言われています。数百年前から海と人が紡いだ島の特性が、今、海洋深層水利用という新しい海の恵みを受け入れ発展させることにつながっているのは、ロマンがあって面白いですね。

今年の全国大会では、昨年環境省事業で設置されたOTEC用熱交換器試験施設や、今春にオープンした藻類農園FARMOなどの新規施設とともに、前述の琉球王朝時代の文化遺産、また同じく徒歩圏内にある久米島紬の工房・展示館「ユイマール館」に足を延ばして、海と島との歴史にも思いを馳せてみるのはいかがでしょうか。また、県道から道一本集落内に入ると、ゆるやかにカーブする路地に立ち並ぶ民家の門柱には魔除けのシーサー、軒下には火事除けのスイジガイ、丁字路には石敢當、といった、呪術的な空間が今も生活の間近にあることを感じられる景色にも出会えます。幸い、11月の沖縄は1年でもっとも降水量が少なく気温も穏やかで、町歩きにぴったりの時期です。

皆さまのご来島をお待ちしています。

海洋深層水2025久米島大会 実行委員会委員長  
桃原秀雄（久米島町町長）